

審美と咬合

小田中康裕 Odanaka Yasuhiro (有)バーレン oral design

1985年 岩手歯科技工専門学校、卒業.

1987年 IDA ラボテックスクール卒業.

1986年 国際デンタルアカデミー、勤務.

1987年 上北沢歯科、勤務.

1995年 (有)バーレン設立.

2009年 現在に至る

I. はじめに

20代の頃、口腔内に装着された私の製作したセラミッククラウンは、何らかのエラーから咬合調整により審美的補綴物からは、かけ離れた補綴物になる事が多々あった。しかし、臨床を行っている中で、無調整に近い状態で口腔内にセットされる事が何度かあった。その時の技工作業の感触を思い起こすと、無意識ではあるが、そのときの技工作業に共通点が見つかり、それを技工のヒントとする事ができた。それをきっかけに、口腔内で咬合調整の少ない補綴物を製作する事ができるようになった。そういう事から言えば「審美」が先か「咬合」が先かという論点から言えば、「咬合」が先という事が言えると思う。また、口腔内で補綴物が壊れることなく長期で維持しなければ、それこそ「審美」や「咬合」以前の話になってしまう。そこで特に臼歯部でのポーセレンクラウンのコーピングのデザイン方法も考察していきたいと思う

II. 方法

- ・ バイト材の選択と咬合器マウント
- ・ 偶然見つけた咬合調整法。
- ・ ポーセレンクラウンの咬合接触点位置について。
- ・ ポーセレンクラウンのコーピングデザイン。
- ・ また前歯部における形態と、咬合の考え方。

III. まとめ

一般臨床では「審美」が先か「咬合」が先かというテーマはいつも共存できている事が難しい事であるが、材料や、普段行っている技工作業をもう一度見直し考察する事によって、より審美と咬合が共存する補綴物を製作できると思う。